Japanese Association for Tibetan Studies

ていただいたが、奇妙なことに先生と私の会話は全部チベット語であった。チベット人が集まる食堂では特に、「貞兼君、何にしますか？僕は餃子とうどん汁にします」などと大きな声で愉快がっていらした。帰国される直前、先生は一通の封書をかばんから出してみせられた。ずっと持ち歩いていらしたのか封書は角が取れていた。私のトリブヴァン大学への推薦状であった。大学へ提出する期限がすぎても先生からのお返事がなく、代わりに日本大使館の菊地法純氏の推薦状をいただいていた。多分先生は、これ以上チベット世界に踏み出すと取り返しがつかなくなると予想されていたのではないかと思う。

先生の御生涯をかけて完成したチベットの宗教、歴史、言語の研究センターとしての東洋文庫チベット研究室は、2003年4月をもってその役割を終え、新たな名称で再出発をした。現在、チベット研究の基地は日本の関係大学や研究所のいたるところに、それぞれの特色を持って拡大し、相互の情報交換も活発になされている。そのことを先生は期待し、もっとも望んでおられたと思う。奇しくもチベット研究室が閉じた同じ年に先生は身罷られた。御冥福をお祈りすると共に、万感を込めて「先生、ありがとうございます」と申し上げたい。

北村甫先生を悼む

長野　泰彦

日本チベット学会前会長、北村甫先生は2003年12月16日胸膜炎のため逝去された。北村先生は戦後の日本におけるチベット学の牽引役のおひとりであり、専門とする言語学だけでなく、総合的なチベット学を志向し、且つ、様々な学問の機会を共同利用する仕組みをオープンにした点で、日本での新しい研究のあり方の先駆者と言って過言でない。

1942年旧制静岡高校から東京帝国大学文学部に入学したが、翌年学徒動員のため休学。1945年に復学し、言語学科に籍をおいていたが、高校で文科丙類だったこともあって、フランス文学にも相当傾倒した。『ガルガンチュア物語』などの中世文学研究で高名な渡辺一夫教授、マラルメ研究で知られていた鈴木信太郎教授といった当代随一の文学者の講義を堪能し、成績もよかったらしい。渡辺教授が先生の答案にコメントをつけて返却したものを大事にとっておられた。1948年東大文学部言語学科を卒業。卒業論文は『五體清文鑑における滿洲字の表す西藏語の音韻について』であった。この時代チベットへ現地調査に行くことなど到底考えられなかったわけで、音韻体系が比較的明確に知られていた満州語を梃子にチベット語の音韻を再構しようとする試みであった。先生はこの論文そのものもさることながら、むしろ、五体清文鑑全ての語彙エントリーを満州語とチベット語について書き出したデータカードを大切に保管しておられ、一度ご自宅で見せていただいたことがある。戦後すぐに神田の古本屋で仕入れたという軍用郵便葉書の裏を使ったもので、表の罫が適当に透けて見えて一番使いやすかったのだとおっしゃっていた。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

卒業後、GHQ 専門技術官、二松学舎専門学校予科教授、国立国語研究所研究員、東大文学部助手を経て、1958 年財団法人東洋文庫研究員となった。この間、1955 年に発表された研究社の『世界言語概説』下巻「チベット語」（渡辺照宏氏と共著：北村先生の担当は音韻・文字）は初期の本格的なチベット語記述と言える。この記述は Y. R. Chao：*Love Songs of the Sixth Dalai Lama Tshangs-dbyangs-rgya-mtsho* に示された音声表記をもとに現代チベット語の音韻とその文字との対応を分析したものである。

東洋文庫での仕事は「藏和辞典編纂」で、これは河口慧海師将来チベット蔵外文献が東洋文庫所蔵となる際の条件となっていたものであった。辞典の項目を定めるための基本的文献の洗い出し、その異本の調査、基礎的語彙項目の選定などが藏和辞典編集委員会（委員長は渡辺照宏氏）のもとに行われ、多くのガリ版刷りの有用な資料が残っている。

1959 年チベット動乱が勃発し、約 10 万人のチベット人がインド・ネパールなどへ逃れた。これを機にチベット人との協同のもとにいかにしてチベット学を振興させるかが国際的に問題となり、ロックフェラー財団が支援の名乗りを上げた。各国にチベット学研究の拠点を作り、そこにチベット人を招聘して共同研究を行うというプランであった。日本では東洋文庫がその拠点となり、北村先生と当時東洋文庫におられた初期入蔵者のひとり、多田等観師のおふたりが招聘すべきチベット人を選考するため、インドへ派遣された。1961 年のことである。この結果、サキャ派活仏ソナム・ギャムツォ師、ニンマ派学僧ケツン・サンポ師、ツァロン家のツェリン・ドルマ女史の 3 名が日本へ招かれ、日本人とチベット人との共同研究が始まったのである。おふたりの学僧は文献の読解や解釈の上で日本の仏教研究界に大きな貢献をされ、ツェリン・ドルマ女史は英語が堪能だったこともあって、北村先生の記述言語学研究を支えた。この後の先生のラサ方言記述研究は主として同女史の発話をもとにしている。

各国が選択したチベット人研究協力者の内容を見ると、それぞれに特色がある。英国は 3 名のポン教学僧を招聘したが、これは D. Snellgrove 教授の考えが反映していたと推測する。日本の場合は、多くの国がゲル派高僧を招聘したのに対し、古派である。ダライからの推薦はゲル派だったようだが、多田師が「私は猊下以上にゲル派の僧の実態が分かっている」と答えたと聞いている。ツェリン・ドルマ女史という俗人を招聘したのも日本だけだった。

これらの動きを受け、東洋文庫の蔵和辞典編集委員会は「チベット研究室」となり、言語・歴史・宗教を含む総合的なチベット研究へと展開するが、北村先生はその中心的役割を果たした。1964 年東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所（AA 研）へ移られたが、東洋文庫と AA 研における研究活動は車の両輪のようにかみ合っていたのである。東洋文庫チベット研究室の活動は文部省科学研究費補助金の裏づけを得て「チベット特別研究」となり、ケツン・サンポ師とツェリン・ドルマさんがインドへ戻られた後も、毎年チベット人学者が招聘されて共同研究が継続した。北村先生が特に注力したのは AA 研及び東洋文庫で開かれたチベット語の言語研修・講習会で、多くの学徒にじかにチベット語に接する機会を与えた点で功績は大きい。現在活躍中の 45

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

歳以上のチベット学者は何らかの意味でその恩恵にあずかっていると思う。

言語研修テキストを除くと、著書の類は必ずしも多くない。しかし、書かれたものは実に慎重に作られていて、例えば、『AA 研文法便覧 Tibetan(Lhasa dialect)』(1977 年) は私が留学していたカリフォルニア大学バークレイ校でも field method 演習で記述の範としてとりあげられ、W. チェイフ教授をして "carefully done!" と言わせたほどである。チェイフ先生は日本では意味論の専門家として有名だが、もともと Caddo 語を軸とするアメリカインディアン諸語の精緻な記述で知られていた。また、『現代チベット語分類辞典』(1990) は、自分の業績については口にしない先生が「気に入っていた」著作である。何が気に入っていたかと言うと、ツェリンさんのような寺院で教育を受けていない市井の人の日常的に使う非正書法的な綴りを記録してあることである。「文献学者なら無価値資料として退けるようなこういった事象も、言語学的に見れば何かを解く鍵になりうる。決してないがしろにはできない」とよく言っておられた。些細だが大事なところにはきっちりこだわる先生の性格がよく現れている。この分類辞典は既に品切れだが、今は AA 研のホームページから利用できるようになっている。

私は 1975 年以来研究上、また、仕事上で先生のご指示とご指導を仰ぐ立場にあったが、公人としての公正さと寛大な社会的姿勢は常に変わることがなく、これは調査における現地の人たちに対する態度にも現れていた。先生はインフォーマントを単なる情報提供者として扱わず、いわば文化の総体として接していたと思う。このような先生のもとで仕事ができたことにあらためて感謝するものである。

先生の堂々たる体躯や 70 歳代前半までは青海省での調査に出かけておられたことから、この早すぎたご逝去を誰も予感しなかったと思う。2003 年夏胃ガンのため胃を全摘出したが、手術は成功したと聞いていただけに残念と言うほかない。謹んでご冥福をお祈りしたい。

NII-Electronic Library Service